

2023年夏・北海道・道南の山巡り（個人 山行）

（報告）赤澤 東洋

◎期日 : 2023年7月3日（月）～14日（金）12日間

◎メンバー: 赤澤、他1名（妻）

冬は蔵王で樹氷を存分に堪能出来たので夏は北海道と決めた。北海道は仕事を含め登山、スキー、自転車等で十数回訪れてはいたが、私の好きな農民画家坂本直行氏の愛した日高の山には行った事がないのでどうしてもその片鱗に触れてみたかった。

まず交通手段だが 2016 年に開通した新幹線で函館へ出て、道内の移動はレンタカーを利用する事にした。大宮から新函館北斗まで往復料金 1 人 38,400 円、所要時間 4 時間弱、この速さには驚く。借りた車はトヨタ・ライズ、5 月に納車されたばかりの新車で疵でもつけたらヤバイなあと気を引き締めた。料金は 11 日間で 103,000 円（他に保険料？9,800 円）。

7月3日（月）：移動日

大宮 6:57⇒10:53 新函館北斗

函館から約 400 kmを凡そ 5 時間かけて長距離ドライブ、様似町アポイ山荘キャンプ場へ入る。テント泊

4日（火）：楽古岳 1471m 登山

この山こそ坂本直行氏が最も愛した山であり、今回一番目標とした山。ナビに従い浦河町に戻り国道 236 号線から登山口へ向かうも標識が無くウロウロアポイ山荘から 2 時間近くかかって登山口の楽古山荘駐車場到着。先客は無く私達の車だけ、薄く海霧がかかり暗く寒々として今にもオヤジが出てきそうな侘しさ、これが日高なのだろう。

歩き始めて間もなくメナシュンベツ川を渡渉、沢沿いの登山道はその後 7、8 回も渡渉する羽目となり沢に慣れない相棒は緊張しっぱなし、やがて沢を離れると《登山道取付》《登山口左折・浦河山岳会》の 2 枚の標識があり本格的急登が始まった。ミズナラやシナノキの樹林帯は見晴らしが効かずただ苦しいだけで厳しく、あえいでいると若いカップルに追いつかれた。急登を足取り軽くグングン登っていく若者の姿に羨望を覚えるが、何はともあれ我々だけでは無い事が分かりホッとする。ハイマツが何本か出てきたと思ったら視界が開け前方に目指す楽古岳が姿を現した。標高は 1160m程でさしずめ八合目っていう所、先は長くもう一山越えねばならない。まだ 10 時、時間はあるが昨日の慣れない車で長距離ドライブの疲れが残りかなりへばっている。どうしようかと迷っていたら、1 人登ってきた。中年の男性で疲れた様子もなく先へ進んでいったが、今の状態では往復 3 時間以上かかりそうなので潔くここで退却とした。

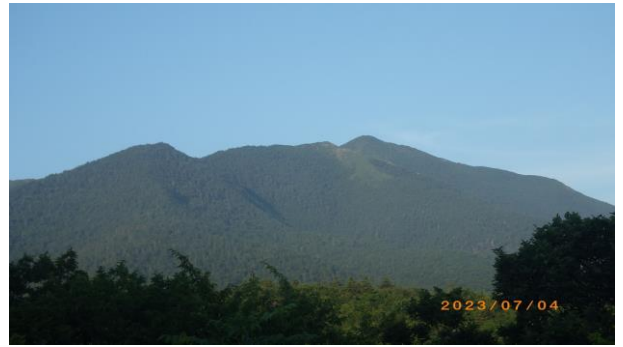


楽古岳メナシュンベツ川渡渉



八合目より仰ぐ楽古岳

勢い込んで挑んだ山だけに実に残念だが、現実には厳しくまあこんなもんかと諦めるしかない。アポイ山荘キャンプ場に戻り山荘で入浴、いいお風呂だったが温泉ではないらしい。山荘の高台からアポイ岳がよく見え明日への意欲をかきたてた。



アポイ山荘よりアポイ岳

《コースタイム》

楽古山荘登山口 6:30 ⇒ 10:05 見晴台 10:25
⇒ 12:45 登山口下山

5日(水)：アポイ岳 810m 登山

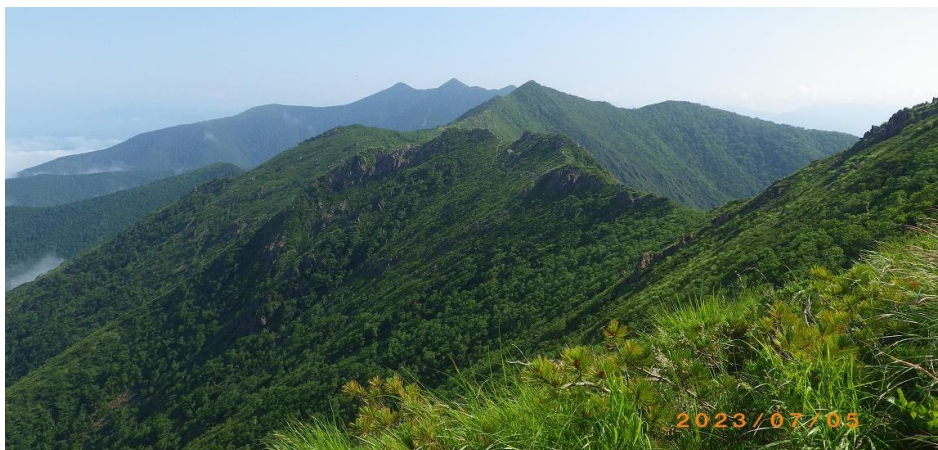
この山名を知ったのは学生時代に2夏続けて北海道へ出かけた折に、列車で同席したオジさんから高山植物の宝庫、是非行くべきだと勧められたからだから、もう60年も前になる。今のJRが国鉄だったあの頃が日本の鉄道網が一番充実していた時期で、全国津々浦々網の目のように線路が張り巡らされ、国民は安心して列車に身をゆだねる事が出来た。そこに拍車を掛けたのが「均一周遊券」で関東地区から北海道までの1往復と道内の国鉄乗り放題・有効期間20日間・5000円が売り出され、夏ともなれば若者はこぞって北海道へと旅立ったものだ。横長のキスリングは狭い通路は歩き難く横になって歩く事からカニ族と称され、夜行列車はホテル代り、あれは便利だった。

こちらは朝が早い。緯度のせいかわずか3時過ぎるともう明け始める。わずか810mの低山だが、登山口が100m程なので標高差700m余り、決して楽な山ではない。海が近いせいか薄く朝靄がかかる中、5時に出発。キャンプ場に隣接するビジターセンター裏が登山口でテントからそのまま歩き出せるのがいい。

歩き始めてすぐに沢があり、外部から泥や種子を持ち込まないよう靴底を洗っていざ登山道へ。広い林道は緩やかで歩き易く朝一番で到着した北見在住の84歳の男性と相前後する。一合目毎にベンチが設けられ休めるので老兵には有難く、昨日の楽古岳とは大違い、登頂を確信した。ミスナラやヒダカゴヨウの樹林帯を抜けると赤レンガ作りの避難小屋の立つ五合目となり、顔を出した青空の右手前方にはアポイ岳山頂も見えてきて足取りも軽くなる。小屋から先は岩尾根となり、標高400m程度なのにハイマツが出てくるのがいかにも北海道らしい。



サマニオトキリ



アポイ岳馬の背よりピンネシリ

アポイキンバイ、キンロバイ等沢山の花が咲き乱れる胸突き八丁の岩稜帯を詰めていくと、カンラン岩（地球内部のマントルが地上に露出したもので世界的に有名）の露出した馬の背となり、吉田岳からピンネシリへかけて奥深い日高山脈の眺望に目を奪われた。縦走も可能なようだが老兵にはもう無理だ。低くたちこめる海霧に遮られ襟裳岬や海が見えないのが残念だった。最後の急登の末辿り着いた頂上はダケカンバの樹林帯の中にあり、本州はもとより、北海道でもハイマツ帯の上にダケカンバという植生はアポイ岳固有のものとの事で、はっきりした理由は分からず謎なのだそう。下山は往路を戻り急いでテントを撤収、襟裳岬へ立ち寄り新鮮な海鮮丼で昼食、一路阿寒湖を目指し再び 400 km近い長距離ドライブ、阿寒湖では雨の予報を受け、キャンプ場で温泉付きの安宿を紹介してもらった。

《コースタイム》

登山口 5:00 ⇒ 6:50 五合目避難小屋 7:00 ⇒ 8:15 アポイ岳山頂 8:30 ⇒ 10:40 登山口下山

6日（木）：雨天の為休養日とし、摩周湖・硫黄山・屈斜路湖和琴半島巡りを楽しむ

- 摩周湖 小雨と霧の為視界数十m、何も見えず。かって湖畔まで下りた事あり
- 硫黄山 ここは初めて。アイヌ語ではアトサヌプリといい裸の山を意味する。火山性ガスを含んだ水蒸気の噴煙がゴウゴウと音をたてて迫力満点
- 和琴半島 ここの露天風呂も2度目。今回は2ヶ所はしごする。ワイルド感あり大いに満足。
紹介された阿寒湖の宿「ドライブインまつおか」は素泊り 1人 3400円、24時間入浴可能の温泉付きでこれは大当たり 2泊する



硫黄山噴気孔



和琴半島露天風呂

7日（金）：雌阿寒岳 1499m 登山

アポイ岳で出会った北見在住の方から、登るなら雄阿寒よりは雌阿寒でしょうとアドバイスを受けていたので雄阿寒岳はパスし、雌阿寒岳を目指す。阿寒湖の先に「雌阿寒岳登山口」の標識がありそこを曲がったのが大間違い、けちの付け始めであった。宿の親父さんもキャンプ場の先を曲がると言っていたし、林道に入って間もなくバンに抜かれた事もあり何の疑いも抱かずに先へ先へと進んだのだが、樹林帯の暗い林道の中、登山口が見つからずウロチョロする羽目になり大きなロスをしてしまった。入れ直したナビに導かれた雌阿寒温泉登山口は明るく開け観光バスも通う間違いようのない登山口、やれやれの思いでアカエゾマツの純林に足を踏み入れた。網の目のように地上に張り巡る木の根は本州の杉の根に比べると細く目も細いのが特徴で面白い。やがてハイマツ帯のトンネルとなり四合目を過ぎると展望が開け振り返ると樹海の中に

エメラルド色のオンネトーが見え、火山礫の中の急登をジグザクと登り続けてひと踏ん張りすれば九合目付近で火口を見下ろす外輪山に達した。噴煙上げる火口は深く活発な火山活動中で荒涼とした火口風景は想像以上の迫力がある。火口の深さが300mというから富士山の70mを思えばその威容さが分るだろう。



雌阿寒岳火口

礫地の雌阿寒岳山頂はふきさらして強風に飛ばされそうになり、落ち着いて休んでいられず早々に下山を決めて往路を戻る事にした。順調に下ってきてあと200m位で登山口という地点で、網の目のように張り廻られた木の根に右足が引っ掛かりオットット！勢い着けて前向きに吹っ飛ばされた。傾斜は緩かったが油断してストックは畳んでいたため手は空をつかむだけ、傾斜の分だけ余計に勢いついてつんのめり、数回飛ばされてウツとなった。立木や岩にぶつかったわけではないのに、右わき腹が痛く息が出来ない。「あっちゃんやってしまった！ドジめ！」「まだ先は長いのにこれでおしまいか！？」一瞬お先真っ暗となったが、立ち上がって冷静に点検してみると骨は折れてはおらずヒビが入った程度かと素人判断、旅を続ける事にし、糠平温泉に向かった。時間があつたので、ウペペサンケ山の登山口まで下見に行ってみたが林道は車があまり通らないのか雑草が繁り、しかも途中で通行止めとなっていて人が入っているような気配がなく引き返した。今宵の宿は上士幌町の「東大雪ぬかびらユースホテル」1泊夕食付で1人6,500円、洒落た宿で勿論温泉付きで宿泊者は私達含めて12名、ペアが3組であとの6名は男性ソロという顔ぶれ、夕食後はご主人から近郊紹介のライドショーがあつた。



イワブクロ



脚を引っ掛けるアカエゾマツの根

《コースタイム》

雌阿寒温泉登山口 6:25 ⇒ 9:20 雌阿寒岳 9:30 ⇒ 11:40 下山

8日(土): ウペペサンケ山 1848m 転じて層雲峡・黒岳 1984m 登山

昨夜は寝返り打てず痛くて殆んど眠れず、ウペペサンケは断念する。なぜ日本 300 名山にも入っていないウペペサンケかということ、中学生の頃地理が好きで帝国書院や古今書院発行の「社会科地図帳」は無人島に持って行く 1 冊はこれしかないという位の我が愛読書、北海道の地図ではほぼど真ん中の石狩岳の下にウペペサンケ山が大きく出ていて長く記憶に焼き付き、さらにファンだった浦和浪漫山岳会のマドンナ「池田知沙子」嬢の「ウペペサンケ」なる詩に背中押されての事だ。池田嬢は浦和に移る前に数年帯広に居住し「帯広ワラジ会」に属しウペペサンケは庭みたいなものだったらしい。

正常な状態ならいざ知らず、肋骨損傷の痛みで寝ていられず壁に背もたれして一晩過ごしたような有様なので、ウペペサンケ山は潔く断念し、国道 273 号線を北上し層雲峡に向かった。途中三国峠にてウペペサンケ山に初見参、ゆったりした台形の頂稜部はどこが頂上か分からない位に横長で、鋭く尖がった山の多い周辺の山々の中であって特異な存在、目に焼き付けた。



三国峠よりウペペサンケ山

黒岳は 60 年前に旭岳から縦走した折に登ったが覚えているのはロープウエー等無かった事位、今は 7 時前から運転されるロープウエーとリフトを乗り継げば七合目 1520m 地点まで歩かずに行ける楽チンコースで有難い。

ザックは背負えないので水だけ持って空身で登る。普通に歩くだけなら痛みはないのだが、岩場で足上げて「どっころしょ」と乗っ越す時などジンと痛みが走る。とにかく急がず、焦らずでゆっくりと前に進む。さすが大雪山で登山道には何力所か残雪が残り、スニーカーの観光客は皆さん手こずっていて、途中退却者も出てくる。アジア系の外国人が多い。



リフトから見上げる黒岳

嬉しかったのが高山植物の多い事で、中でも東北の一部と北海道でしか見られないというウコンウツギが丁度咲き始めたばかり、黄色い花の大群落は疲れや痛みをしばし忘れさせてくれた。

標準タイム 1 時間の所を 2 時間かけて登った黒岳頂上からは遥か彼方に旭岳も見えて 60 年前が懐かしく思い出され感慨無量、好天に恵まれ痛みを耐えて頑張ったご褒美に大満足し、次の予定地十勝岳温泉に向かった。



黒岳山頂 左手奥に旭岳

《コースタイム》

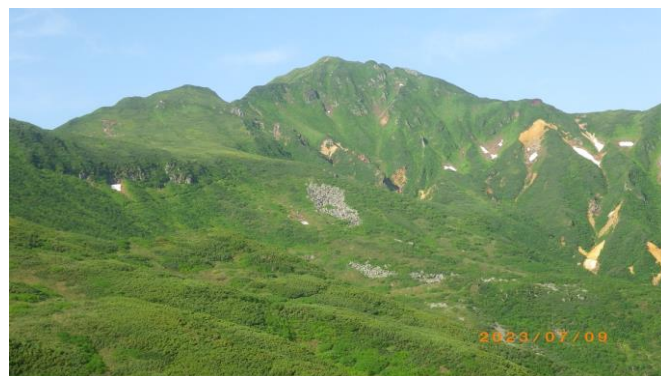
リフト終点・七合目 8:20 ⇒ 10:20 黒岳 10:35 ⇒ 12:00 七合目

9日(日): 富良野岳 1912m 登山

十勝岳登山口の吹上温泉・白銀荘キャンプ場に2泊。テントは壁に寄り掛かる事が出来ないので良く眠れず、明るくなるのが待ちきれず早起きし、国道291号線から十勝岳温泉・凌雲閣登山口に行くときまだ5時前なのに70台収容の駐車場はもう満車状態、仕方なく道路脇の路上駐車となった。ここの標高が1270mなので頂上への標高差は650m程、これなら何とかなると安堵し水だけでなく雨具や昼食も担いだが、それはいささか甘かった。最初は富良野川右岸沿いの砂利道を安政火口に向かってゆるゆると進み、火口手前で沢に下り上ホロ分岐からは上富良野岳を巻くトラバース道となりこれが長かった。直登に比べて歩いて歩いても標高が稼げないという訳でもうバテバテ、青息吐息で着いた縦走路分岐までコースタイム2時間20分の所を1時間30分もオーバーしていた。ここまで来たら苦しくても頂上まで達しない訳にはいかないと、蒸しパンなどで腹ごしらえしザックは岩陰にデポし頂上へむかった。



トカチフフロ



富良野岳全景



富良野岳頂上 背景は十勝岳

絶好の山日和、噴煙上げる十勝岳の先は美瑛岳、遠くはトムラウシだろうか、苦勞の甲斐ありと大満足だった。テン場に戻り温泉で汗を流しビールを飲んでいたらお隣の苦小牧からという70代の男性が下山してきて十勝岳から美瑛岳まで足をのばし10時間だった由、さらに自転車で北海道を回っているというイタリア人ご夫婦に至っては十勝岳から上ホロカメットク山～富良野岳へと縦走し12時間だったという。なんとという健脚、こちらは富良野岳の往復だけで8時間、いやはや。

《コースタイム》

十勝岳温泉 5:10 ⇒ 9:55 富良野岳頂上 10:05 ⇒ 13:25 十勝岳温泉下山

10日(月)：十勝岳は体調不良に付断念。洞爺湖へ移動。

天気は昨日ほどではないが良い天気なので残念。グリーンステイ洞爺湖キャンプ場泊。テントでは眠れないのでバンガローを借りた。他にはテント客が10組位あり。昭和新山見学。今は禁止らしいが61年前は自由に登れた。爆発後10数年、火山活動中で熱気がこもり地熱でキャラバンシューズが焦げ臭かった事を思い出す。



洞爺湖バンガロー

11日(火)：休養日

どこへも出かけずバンガローでゴロゴロする。妻は洗濯。
広いキャンプ場に残るは私達だけ。午後夕立あり、雷鳴とどろき土砂降り。

12日(水)：知内温泉へ移動

ガラ空きの道央自動車道は八雲の手前で通行止め一般道へと誘導される。その理由が熊が侵入した為と
いうのだからいかにも北海道だ。大沼公園で駒ヶ岳の中腹まで行ってみる事にしたが、林道がハッキリせ
ず雨も降ってきたので断念し「しかべ間歇泉」や「恵山岬」を廻る。知内温泉・和楽館は北海道最古の温
泉で開湯800年との由、こぢんまりした山の中の一軒宿、いい温泉で食事食べきれない位でなかなか良
かった。

13日(木)：大千軒岳 1072m は断念し函館へ

大千軒岳の名を知ったのは田中澄江さんの「花の百名山」を読んでの事。キリシタン殉教の地、山上に
立つ十字架等に興味が湧きいつか登りたいと密かに狙っていたものだ。古い山友から松前からの新道コー
スなら手軽に登れると聞いていたのでそのつもりだったが、なんと林道崩壊で通行不可との由、古くから
の奥二岐コースは今の体調では無理と判断し潔く諦めた。

昼前に函館入りし五稜郭や函館山観光、テントや寝袋で15kgもある大型ザックは重いので
コンビニから宅急便で家まで送り身軽にし、レンタカーを返却した。事故もなく無傷で返却ホ
ットした。駅前のどんぶり横丁でイカ刺定食と生ビール2杯、その後バス、ケーブル乗り継いで
函館山に登り夜景見物と洒落込んだが、展望台は人、人、人であふれ押すな、押すなで驚く。



函館夜景

14日(金)：新函館北斗発 10:53 はやぶさ 22号 大宮着 14:39 無事帰宅

総括：

雌阿寒岳で転倒し肋骨損傷、まだ5日目の事でお先真っ暗となった。じっとしていれば痛い事もなく歩くのも平気なので折れてはいない、悪くてもヒビが入っただけと素人判断し山登りを続けたが、それも限界あって後半は動けなくなった。

帰宅して整形外科へ行ったが、まず最初に7日に怪我してどうして今日(18日)なんだと散々嫌味を言われた。山に入っていて帰宅が14日(金)、三連休があり今日になったと云うと、事故っただらすぐ下山し最寄りの医者に行くべきで、2週間も経っているは処置しようがないと先生かなりお冠だった。写真の結果、肋骨1本折れていたが複雑ではなくまずはホッとする。

コロナに翻弄された3年半、今回駄目だったので来年リベンジとはいかない齢になってしまい失われた空白の3年間で恨めしい。事故はいつ起るか分からないもの、今回は相棒がいて随分助かった。コロナは迷惑だったが、その中でただ一つ良かったのがカミさんとの山行が増えた事。心臓と足弱で迷惑かけるので、ひと様との山行は避けねばならず、これからはこのスタイルが増えるにしても北海道はもう無理だろう。ウーン、残念。

了